

エドモンド・バーク著「新訳 フランス革命の省察 「保守主義の父」かく語りき - 」

PHP 研究所 2011年3月14日刊を読む

## 革命派のお手並み拝見

1. 大事業を引き受けようとする者は、確立された手順に沿って仕事を進める場合でも、それにふさわしい能力があることを示すべきだ。まして国家全体について、目下の問題点を解決するだけでなく、根本の憲法まで作り直そうとする者は、並々ならぬ力量を有していると証明する義務を負う。
2. あまつさえフランスの革命派は、いままで政治にかかわった経験がないにもかかわらず、歴史に前例のないことをやってのけるつもりでいる。ならば彼らの計画には、圧倒的なまでの英知が浮かび上がっていないなければならない。そのような形跡は見られるか？
3. ひとつここで、国民議会がしてきたことを手短かに検証してみたい。対象となるのは立法・行政・司法、さらには軍隊と財政である。革命派の連中は、自分たちが誰よりも優れていると信じて疑わないようだが、これに具体的な裏付けがあるのか調べてみようではないか。
4. まず注目されるのは、新しいフランス共和国の基本的なあり方だ。そこには史上空前の大改革を成功に導くだけの力量が表れていなければならない。革命派が作り上げようとする政治システムは、いかなる発想に基づいているのか？それが持つ特徴は？民主的な国家を築くという目標に照らして、当のシステムはふさわしいか？
5. 国家、わけても民主主義的な国家は、国民の幸福と繁栄を達成できなければ意味がない。問われるべきは、そのためのポテンシャルの有無である。システムに首尾一貫した整合性が見られるかどうか、あわせてチェックしよう。
6. 伝統的な政治システムのよしあしなら、実績によって評価することができる。国民が幸福に統合され、力強く繁栄していれば、あとは推して知るべしだ。結果良ければすべて良し、そう見なして差し支えあるまい。
7. また長年続いてきたシステムの場合、理論的な整合性を持たない箇所についても、ちゃんと対応策が確立されている。というよりシステム自体が、さまざまな試行錯誤を積み重ねたあげくでき上がったものなのである。

- 8 . 最初に理論があり、それを踏まえてシステムがつくられる事例はめったにない。実践を通じて練り上げられたシステムが先にあって、そこから理論が抽出されるのだ。こういった国々の政治を観察するとわかるものの、最善の結果を得るには、当初の方針とは矛盾するような方法をしばしば用いねばならない。
- 9 . 「論より証拠」というけれども、政治の世界では「論より経験」である。経験から得られた知恵は、ときとしてシステム自体にも変更をもたらす。かかる変更は「逸脱」や「脱線」のごとく思われがちだが、「改善」となっていることも多い。
- 10 . イギリスの憲法は、そのような過程を経て成立したシステムの好例であろう。もとより国の進むべき方向をめぐって、さまざまな誤りやブレは生じるにしろ、これらも見つかり次第すぐに補正されるため、道を大きく踏み外すことはない。
- 11 . ただしこれは、経験重視型のシステムについての話だ。純粋な理論に基づいて構築されたばかりのシステムならば、あらゆる点において完璧な整合性を備えていることが期待される。なにせ革命派の連中は、いままでのフランスのあり方とうまく噛み合うように配慮しつつ、新たな国づくりを進めているのではない。そんなことはまるでお構いなしに、自分たちが理想的と信じるシステムをつくっているのである。

P203 ~ 205

[コメント]

ならば、日本の民主党政権はどうなのかとつい考えてしまう。日本の自由民主党が真の保守政党になる条件とは何か、バークの政治思想を丹念に、また、謙虚に学ぶ以外ない。日本人は政治家も含め、バークについて余りにも知らなすぎるように思えてならない。

- 2011年5月4日林 明夫記 -